

研究者氏名：赤坂 雪江

調査・活動テーマ：『古今半田衆』巻第一 半田停車場前

### 調査・活動の目的

一般的に中心市街地活性化を考える際、再開発や商業活性化をその手段とすることが多いが、それにより好転する要素もあれば、その地域の個性が薄れていくような印象を受けることもある。JR半田駅周辺についても、区画整理や鉄道高架化へ向けて再開発が進められようとしており、期待と危惧を感じる場所である。

市民の認識としては、半田市の中心市街地（名鉄知多半田駅・JR半田駅周辺）の中でも、JR半田駅前は、市役所やミツカン本社ビルや半田運河があるイメージから、現半田市の古くからの中心地であると感じているだろう。それは、観光的要素に恵まれていることや、歴史的建造物を活かした企業や市民活動が熱心に続けられてきたことによる賜物である。

一方で、「なぜ半田市の中心が半田駅周辺であるのか？」を正しく認識している市民の割合は、高くないのではないかと印象がある。中心市街地活性化を考える前提として、半田駅周辺の中心性についての市民認識こそが個性消失を食い止めると考える。

そこで、本研究では、特に若い世代の住民が見やすく、もう一段階認識を深めてもらえるようなまち歩き記録集を作成する。その目的は以下2つである。

【目的1】 JR半田駅周辺の現在の姿と、資料を介して古き良き時代の面影を記録すること。

【目的2】 「なぜ半田市の中心が半田駅周辺になりえたのか？」を分かりやすく解説すること。

### 調査や活動の取組内容および達成状況・成果内容

調査や活動の取組内容および達成状況・成果内容以上のことを念頭に、難しくなりすぎないように探偵気取りのトイプードル犬・茶々丸がまち歩きをしながら、「半田の中の半田とは？」という疑問の答えを探していくというマンガ本を作成した。また、

とっつきにくい歴史や文化という概念から入るのではなく、主に今の生活風景や実際にあるモノをきっかけにすることに努め、先行研究や資料を分かりやすく紹介した。内容構成は以下のとおり。

#### 【エピソード1：はんだのなかのはんだ？】

昭和7年発行の『半田町案内図絵』をきっかけに、通称半田運河の十ヶ川下流、通称三角と呼ばれていた半田港、船大工がかけてくれたことによる源兵衛橋を住民が大切にしてきた話を紹介した。

#### 【エピソード2：消えた橋の痕跡をさがそう】

半田運河西岸道路の高低差から、昭和初期にはあったと思われる太鼓橋の宮崎橋の存在を紹介した。地形のほかに宮崎橋の存在を思わせる電柱にあるNTTプレート記載の古い地名をきっかけに、JR半田駅周辺のNTTプレートの調査結果と、昭和13年地図の比較結果が近似することを紹介した。

#### 【エピソード3：古い地名は情報源】

NTTプレートや昭和13年地図にも記載がある地名のうち、「北・南大股」「名切」「山崎」が水に関係すること、光照院の山号でもある「前明山」が海水溜と関係する「前ノ山」の名残であることを紹介した。土地の来歴を知ることにより、未来を考える地域学習や減災対策に生かすことが可能であろう。

#### 【エピソード4：新川どこ行った？】

現在暗渠化されている新川は、思案橋から十ヶ川の間、JR半田駅南で実際に見られることから、花街があった昔と今も残る雰囲気を紹介した。また、半田駅前と知多半田駅側とをつなぐ「ガード下」の風景は、このエリアの個性的な光景であることについて触れた。

#### 【エピソード5：唯一の坂の上に】

平坦な道路が広がる半田駅周辺において、唯一と言っていいほど長く続く上り坂の上に、山之神社がある。周辺道路と比較すると、山之神社から6本もの道路が出ていて、山・海・酒の神に対する住民の信仰が見て取れる。また、サロン山ノ神で地域住民の方が、伊勢湾台風や昭和の生活風景について昨日のここのように話して下さった昔話を紹介した。

#### 【エピソード6：こだわりの港】

住民の方から「伊勢湾台風の被害が、源兵衛橋より東（海側）が激しかった」と聞いた話をきっかけに、古地図を比較し、半田市役所のあるあたりは山方新田という干拓地であることを紹介した。また、先行研究をもとに、待望された元禄8（1695）年の山方新田の完成が半田駅周辺の画期であったことを紹介した。詳細なストーリーとしては以下のとおりである。

戦国時代以前から船大工が船づくりをしていたが、本能寺の変の後に徳川家康が半田港あたりから三河へ渡ったことを契機に半田港が徳川幕府の庇護を受け発展した。しかし遠浅の海であったことや阿久比川が運ぶ砂で港の水深が浅くなり、船が港を出入りできない困難な状況があった。また、この辺りが低い土地であることから、津波や大雨による水害で半田村は水浸しになり、人々が困っていたため、地元名士の出資により山方新田が干拓され、陸と海と川（船江）の凹凸がハッキリすることで、港に船が安定的に出入りできる状況ができ、水害がなくなった。その結果、酒や酢を江戸に運んだ船が、江戸文化を半田へもたらし、商売繁盛により栄えた旦那衆、明治大正期の華やかな花街、昭和の元気な商店街の様子に繋がる。決して低く安全とは言えない土地だが、巨大土木工事により地形を無理やり変えてまでも半田港にこだわった人々の思いが、半田駅周辺を半田村の中心地へと成長させた。

#### 【エピソード7：はんだってなんだ？】

ここで改めて、「半田」の語源についての諸説と、江戸時代6つの村だった頃から半田市になるまでの

変遷を紹介した。また、明治19年国鉄武豊線開業時からあった半田駅、知多酪農発祥の地、大踏切も、この周辺の個性的な光景であることを紹介した。

江戸時代の半田村は上半田と下半田に分かれていたが、古い半田村の中心であった上半田に対し、新たに開発されていった新しい下半田が、山方新田の干拓を契機に半田港を中心に発展し、現在の半田市の中心となったことを振り返った。なお、毎日地域の写真撮影をされている方のご厚意で、四季や朝夕通じた町の表情を掲載した。

#### 【エピソード8：学生さんたちのアイデア】

日本福祉大学半田キャンパスの情報工学・福祉工学分野の学生達に、上記の内容を基に現代に生かすアイデアを出していただいた。アプリを利用したリアルタイムの意見を追うと、当初はなんとなくの印象だった半田駅周辺について、その中心性や新田の状況、現地を歩き妄想力を高めることの大切さを伝え、アイデアにも深みが出るように見受けられた点を紹介した。

#### 優れた効果・成果があがった点

街の記録については、今と昔を比較しながら、情報や考察を付与して写真を多く収録することができた。また、半田の中心性については、半田市の変遷や、山方新田の完成を画期とする港の発展、その後の華やかさにつながることを追うことができた。全体的には、歴史文化というと億劫になりがちで、興味をもつきっかけも少ないが、犬を主人公とした漫画を介して気軽な印象を与えつつも、住民に気づきを提示することができたのではないかと思っている。地域の来歴を知り、何気ない生活風景を深く読み解く妄想力を持つことで、「どこにでもあるまちではない」という認識や想像力の高まりを期待したい。

#### 委嘱期間終了後の今後の展望

『古今半田衆』については、1作目のモデルケースとして、「探偵気取りのトイプードル茶々丸がまち

歩きする現地写真多めのマンガ本」というスタイルを確立できたため、シリーズ化していきたい。また、インターネット上に公開し、多くの目に触れ地域を知るきっかけとなる気軽な存在にしたい。

加えて、本研究を活かし、若い世代の地域学習に

活用できるように働きかけたいと考えている。